

茨 田 堤 考

田 中 清*

1. ま え が き

歴史にみられる水文事象を調べ、それを数量的に復原し、水文学の補助資料をうるために古水文学 Paleohydrology なる分野が成り立つであろう。

わが国の治水事業の初頭を飾る仁徳天皇の治水事蹟は古墳時代に属し、考古学的先史時代と文献の歴史時代との過渡期であり、その取り扱いには考古学・文献のほか歴史地理・民俗学等の手段を借りて考察してみる必要があるようだ。

日本書紀(以下紀と略す)の仁徳紀によれば、土木関係の事蹟として、

- (1) 仁徳天皇 11 年(紀の年代によれば西暦 323 年) 10 月、堀江を掘り茨田堤を築く、
 - (2) 同 12 年 10 月、山背の栗隈の累に大溝を掘り田に水を引く、
 - (3) 同 13 年 9 月、茨田屯倉を立つ、
 - (4) 同年 10 月、和四池を掘り、また横野堤を築く、
 - (5) 同 14 年 11 月、猪甘津に小橋を渡す(大阪市東成区猪飼野鶴橋)、
 - (6) 同年、京中に大道をおき、感致に大溝を掘り石川の水を引きて田を開く、
- 等が出ている。

紀の応神から継体・欽明までは、皇統譜としては認められているが、旧辞の部分は編者の作為が多いとされ、仁徳紀も儒教的粉飾とみなされている。

大化改新(646 年)以後の律令政治においては、公功(公共事業)はあらかじめ太政官の認許を経て、農閑期たる 10 月から翌年 2 月末までの間に実施する制があり、仁徳紀の土木事業の日付が 10 月となっているのも、紀の編者による作為の現われとみるべきであろう。

2. 仁徳時代の社会情勢

梁書・宋書にみえる遣使から、倭 5 王の讃に仁徳天皇または履中天皇が比定され、讃は 420 年ごろの天皇であるから、仁徳天皇の治水事蹟なるものは 4 世紀末から 5 世紀初頭にかけてのできごととみるべきである。

(1) 国家統一と人口増加

4 世紀ごろには大和朝廷による国家統一により社会的基礎が安定し、わが国の人口が増加したことが想像され、これに応じて新田開発が必要となったであろう。

わが国の古代人口を推計することはむづかしいが、奈良時代の総人口は 600~700 万人とされており、大化改新において、それ以前の 30 戸より丁丁 1 人を 50 戸に、また 1 里 30 戸を 50 戸に改めているので、人口比率を 315 とみなして仁徳時代の総人口を約 400 万人と推定してみた。これから推して淀川下流左岸の当時の人口は 1~2 万人と想像される。弥生式時代の村落遺跡は 5~10 戸程度からなっているので、3 世紀ごろまでの総人口を 100~150 万人とみて、4~5 世紀に人口が急激に増加したのであろうと想像される。わが国は古代からその時代における農耕利用面積にくらべて、いつの時代でも人口過剰であって、たえず新田開発を必要としていたのではなからうか。

国家統一にともなう特権階級の増加と原始都市の発生は人口分布の不均衡と非生産人口の増加をきたし、土地制度の不安定と相まって原始的階級分化を起し、奴隷的奴婢や丁丁を生み、国家統一による強大な権力はそれらの労働力を集結して、軍事と新田開発に対する大規模な土木事業を可能ならしめたようである。「兵士の名は防禦に備うるも、じつはこれ役夫なり」といわれ、城郭や溜池・堤防等の土木工事に兵士の名のもとに労働力が集結せられたようである。開発の結果は大和朝廷の隆盛をもたらし、それはまた階級分化をいちじるしくし、これが循環していったようである。

(2) 農耕形式の発展

北九州板付遺跡等にもみられるようにわが国の米作農耕は BC 300 年ごろに始まり、BC 100 年ごろには国内に拡がり弥生式時代の文化を形成した。初期農耕時代にはその遺跡分布からみて比高(土地の標高と付近水系の平均水位の標高との差) 5~20 m 間において、自然水利の便がある洪積地と沖積地との移行地帯が利用せられ、ことに谷口扇状地とか盆地周辺部が用いられている。弥生式中期になると遺跡は比高 5 m 線付近にならび、沖積地周縁の洪水はらん限界地帯や、盆地内の微高地が利用されるようになる。比高 5 m の洪水はらん限界地帯は道路や鉄道の路線としてももっとも適しており、道路工事等が古墳や遺跡にぶつかることが多く、土木技術者として留意せねばならない。

弥生式後期から古墳時代に入ると比高 2.5~5 m 間の盆地の沖積低地や河川の自然堤防上やその背後地が利用されるようになり、また溜池や溝を人工水利として掘る必要を生じ、それによって生産は急激に増大し人口集中

* 正員 工博 大阪大学教授、工学部構築工学教室

をきたし、村落の発達、国家の形成を起こさしめた。それと同時にようやく洪水による水害も生ずるに至り、治水事業が必要となってきた。しかし古墳時代から平安初期にかけては、本質的には溜池農耕時代と称すべきであり、応神紀の韓人池・鯉池・軽池・鹿垣池・麿坂池、仁徳紀の和珥池等多くの溜池が掘られている。この時代の環濠前方後円陵も溜池技術の成果であり、濠は溝で農耕地域に通じており、墓であるとともに溜池としての使命をもっていたようである。また延喜主税式の公功料穀稲を全国的に集計してみると、

池溝料	1 550 000 束
堤防・堰料	48 000 束
道路・橋梁・駅家料	92 500 束
その他(官舎・寺院)料	377 000 束

(注 束稲をけば米5升をうる)

となり、平安初期においてもまだ池溝農耕の域を脱せず、堤防等の治水事業はほとんど顧みられなかったことがわかる。この池溝農耕政策による治水の未発達には都の立地条件をも支配し、大和朝廷の都や平城京が奈良盆地に、平安京が山城盆地におかれ、近江盆地・丹波盆地等の盆地に人口が集まる結果となっている。

しかし仁徳時代前後に一時的に、また人口の多い地方では局地的に、河川の沖積低地が利用され堤防等の治水事業が必要となって、それが実施せられたことも事実であろう。

(3) 朝鮮出兵と帰化人

応神紀・仁徳紀には新羅・高麗との国交、朝鮮出兵、大陸への遣使等の条が多く、また高句麗の広開土王碑(好太王碑ともいい鴨緑江北岸輯安県通溝にあり414年長寿王が建立す)によれば391~404年に倭軍は海を渡り高麗軍と戦っており、応神から仁徳のころ大和朝廷は国家統一の余勢をかって朝鮮出兵を行ない、その対策として大陸へ遣使・修交している。そのために都を大和盆地から港津の便がある難波の地に移し、応神天皇は大隅宮を、仁徳天皇は高津宮を営んでおり、その付近には村落が発達し、人口が急に増加したであろう。また難波は朝鮮出兵の兵站基地となり、その背後地たる河内に新田開発を行ない食糧を貯蔵する必要がある、仁徳期には倭・茨田・依納等の屯倉が設けられている。そのために堀江・茨田堤等の治水事業も必要となったのであろう。

この朝鮮出兵や大陸との修交の結果、応神紀にあげられているように、朝鮮や大陸から多数の帰化人が渡来した。仁徳11年には新羅人が朝貢し茨田堤の役に従ったとあり、また呉王の孫と称する意富加牟招君が帰化して茨田邑を賜り茨田の姓を名乗っている。太秦(河内国茨田郡幡多)には百済からの帰化人が住むなど河内平野には帰化人にゆかりのある地名が多い。雄略15年(471年)に秦氏の人口が92部18670人とあるから、4~5世紀

にいかに多くの帰化人が渡来したか想像にあまりある。

これらの帰化人によって農耕・利水・治水等に大陸技術が導入され、茨田堤等の堤防・溜池・広大な陵墓等の土木技術に指導がなされたのである。延喜主税式によれば近江・美濃・丹波・播磨・備前等が税が重くなっていて、これらの地方は大和朝廷の植民地的性格があり、比較的多くの帰化人が入植し、農耕技術と開発が進んでいたためであろう。

(4) 当時の土木技術の水準

最近の難波京遺跡発掘によれば、古代の都が想像以上に整備され、技術的にも相当進んでいたようである。このころに大陸から鉄具が伝来し、これが急速に発達し、鉄具によってはじめて大規模な土木工事が可能となったのであろう。当時の土木技術の水準を知る手がかりとして、仁徳陵等の古墳と筑紫の水城がある。

仁徳陵(大阪府堺)は世界最大の墳墓であり、高橋逸夫先生等の測量によれば、三重濠を周らし、主軸の長さ475m、前方の巾300m、その高さ27m、後円の直径245m、その高さ30m、総土量1405866m³とされ、切盛土量の平衡を計るなど、その施工技術には驚嘆すべきものがある。世界の古代墳墓は方位を南北にとるのが普通であるが、わが国の古墳はその方位がまちまちであり、仁徳陵は海岸線に平行しており、他の多くの陵墓も地形や水系に応じた方位をとっている。奈良時代以前には方位観測の技術はまだわが国に伝来していなかったものようであり、わが国には星に関する神話や民話がほとんどなく、大和民族は方位や日時の観念にとぼしかったらしい。

現存している筑紫の水城(福岡県太宰府町・大野町)は、北の大野山の大野城、南の基山の基肆城とともに、太宰府の防塁をなしている。紀によれば天智3年(664年)対馬・岩波・筑紫等に防を置き、筑紫に大堤を築き水を貯えしむ、これを水城と名づくことあり、また同4年(665年)には太宰府の南北に大野城・基肆城を築いている。このころ朝鮮の情勢が悪化し、唐が朝鮮に進出し、663年8月わが軍は白村江の戦いに大敗し、百済が滅亡し、その遺民が大量に帰化している。そのために外敵来寇と叛乱に備えて水城が築かれた。この築堤・築城には百済人が委嘱され、このときにも大陸技術が導入せられた。

水城は東西の延長1030m、基底巾37m、高さ14mの土堤であり、2段に築かれ、土堤の基底には排水暗キョや樋管が通り、東西2カ所に門跡がある。その西の御笠川が貫流するところには水門があったといわれる。

この水城は仁徳時代より約250年も後に築かれたものではあるが、なお紀の編年(720年)より前であり仁徳陵等と考え合せて、古代の土木技術を推定する資料となりうるであろう。

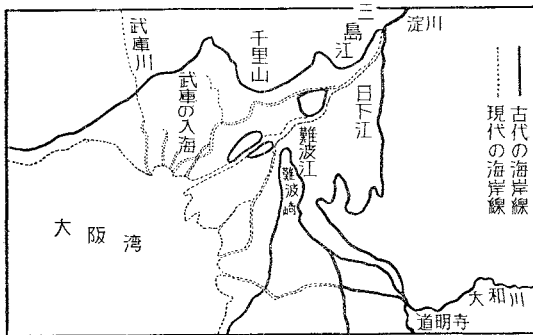
平安後期から鎌倉・足利の中世にかけては政治体制の相違もあって、土木技術はかえって低下したようであり、都も荘園も中小河川の治水に手を焼き、水害のくり返しに苦しんでいる。水城と元寇の石築地とを比較するとその感を深くする。

3. 河内平野の古地形と大和川の変遷

仁徳 11 年 4 月、天皇が難波高津宮（大阪上町台地の北端、大阪 NHK 放送局裏、法円坂付近）より東の方河内平野を眺められた当時の情景は、「野沢広く遠く、田圃少し。河水横に流れて流末とからず。霖雨にあえば海潮逆上り、村里船に乗り、道路壅あり」とある。そのころの淀川下流部の古地形を復原することはなかなかむずかしいが、やや後の万葉時代になると万葉地名等から、その古地形をある程度復原することができる。古地形の復原には古記録・古絵図等のほか、地名・古墳や遺跡の分布・等高線・地質や土質・水害の痕跡や記録・伝承・社寺縁起等を組み合わせて考察せねばならない。

先史時代の海岸線は図-1のように尼ヶ崎の北方麻田付近（伊丹と池田の中間）まで湾入して武庫の入海をな

図-1 先史時代の難波・河内古地形推定図

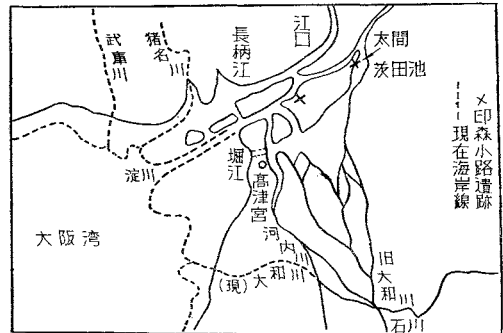


し、千里山丘陵が北から岬となり、海はさらに三島江におよんでいた。また河内平野の大部分は入江であって、上町台地が南から細長い岬となって難波崎といわれ、その東は生駒山麓まで大きな入江となり、その東を難波江、西を日下江とよび、入江は深く布施・八尾から道明寺付近まで湾入していた。淀川はこの入江に三島江・太間（寝屋川市北部）を河口として注ぎ、大和川は石川を合して横に北流し、道明寺付近で難波江に入っていた。この先史時代の海岸線は沖積層の範囲・5m 等高線・古墳分布等から推定されている。また明治 18 年 6 月 17 日から 7 月 2 日にかけての淀川大洪水、大正 6 年 9 月 30 日の淀川右岸洪水のときに、この海岸線が再現された（図-4）。

古代の淀川下流部の古地形は、万葉時代から平安初期ごろの地形が歴史地図にのっているが、2.5m 等高線や大陸への遣使の史料・紀貫之の土佐日記・大江匡房の遊女記等の入江を船で往来した文献から推察すると、難波

江は大きな水道で淀川に通じていたと想像され、この水道の位置は赤川・関目・野江・蒲生の線または城東運河の線ではないかと思われ、また入江は歴史地図にのっているものよりはるかに大きく猪甘津（猪飼野）・布施に達していたようである。これらを考えて仁徳時代の古地形を図-2のように推定してみた。淀川右岸では安威川と

図-2 仁徳天皇のころの難波・河内の古地形推定図



淀川の間には高さ 2~3m の自然堤防が発達し三島から江口に向かって伸び、江口・長柄から豊崎にかけて数個の島や州が発達し八十島をなしていた。その背後をまた茨木のあたりまで長柄江となっていたようである。淀川の左岸は、高さ 2.5~3m 程度の自然堤防が太間（寝屋川市北部）付近から守口・今市・森小路・大宮と伸び、この自然堤防にはところどころ低い所や断間はあったが一応入江と淀川とを分離していたようである。旭区の大宮神社から森小路付近にかけては自然堤防の痕跡と思われるような比高 2.5m 程度の微高地があり、その上に弥生式の森小路遺跡がある。この状態は内水浸水区域を調べるとよくわかる（図-4）。入江は周辺部から埋没して低湿地化しつつあり、ことにその南から大和川の土砂で埋没して行き、州と自然堤防とによって大和川は数条の派川に分れて入江に注ぎ、難波崎の東麓に沿って東除川が大和川の派川を合して河内川（百済川・竜華川ともいわれ、いまの平野川）となって流れ、大和川・河内川は入江を通過して毛馬・長柄で淀川に合していた。

難波崎の東は淀川・大和川・寝屋川による土砂堆積が進み、入江の西縁は今里（東成区）・鴨野（城東区）のあたりや都島・毛馬から関目にかけて沼沢の多い低湿地をなした後の東生郡を形成しつつあったのであろう。これに反して難波崎の西は上町台地の西麓まで波が洗い、海岸線は住吉から生玉神社の西・西堀町・御抜筋（天満橋と天神橋の間）・南森町・中崎町を通り豊崎近くまで達していたと思われる。したがっていまの大阪市の北西部をなしている昔の西成郡はまだ形成されていなかった。

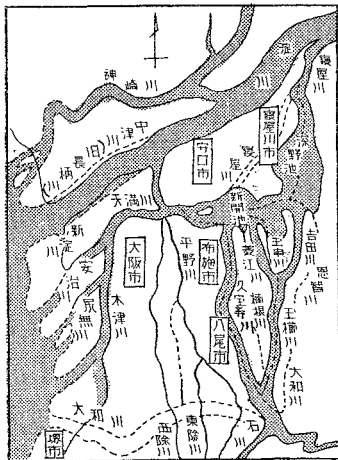
東生西成は春生秋成からきたともいわれ、古くは東生郡を難波大郡、西成郡を難波小郡といった。大化改新では 40 里を大郡、3 里を小郡といい、養老令では 20~16 里を大郡、5~2 里を小郡としたとあるから、古代には

難波崎の東側の低湿地は早くから村落が発達していたが、西側の西成郡の形成ははるかに遅れ、中世以後になって急激に造成せられたものである。西成郡史を調べてみると西成郡の諸神社の社名に中島・姫島・濠標・豊崎とか海に関するものが多く、海上守護の住吉神社が5社もあり、併合神・末社の祭神には漂着神である蛭子神が4社、恵美須(エビス)が1社、その他大海神・水神があり、とくに事平神が9社も合祀されている。事平は金毘羅信仰であり、そのもとはガンジス河のワニを神格化した kumbhira とされ、海上安全の守護神であり、足利初期以後の信仰である。これらはみな海岸線であったことを示しており、西成郡は比較的新しく足利時代以後に急速に陸地造成せられたことが推察される。

中世期末になると細川両家記・応仁後期等の文献があり、古代の入江は広大な沼沢地・低湿地となり、いまの京阪電鉄と片町線との間に8カ所(ハケ庄)の湖水として残り、淀川と大和川の大遊水地となっていた。

徳川時代になると古絵図も多く残っており、諸州めぐり(貝原益軒)・撰陽群談(岡田溪志・1701年)等のくわしい記録もあり復原もしやすくなる。図-3のようにいまの寝屋川水系に沿って北から茨田池・深野池(日下

図-3 徳川初期(元禄以前)の河内古地形(古絵図より)



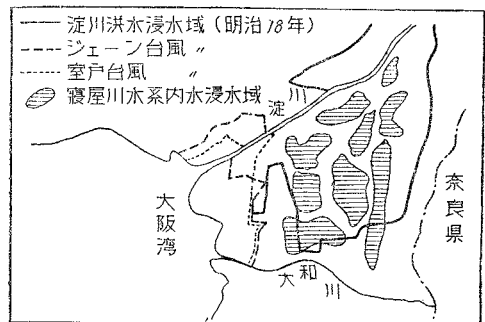
池)・新開池(後に横堤によって箕輪池と新片池とに分けられた)がならび、都島野江には亀ヶ池があり、河内の低湿地は大沼沢地をなし、自然堤防や微高地が点々と島のように浮び、その上に多くの村落が散在していた。

大和川は石川を合して、柏原から北流し、低湿地に

一面に拡がり北から恩智川(吉田川)・玉串川(玉櫛川)・菱江川(楠根川)・久宝寺川・平野川等の派川に分れて大沼沢に流れ込み、さらに淀川に通じていた。河内の低湿地を水害から守るために、大和川を直接西の海に通ぜんとする捷水路の掘削は古代から何回となく試みられた。続日本紀(以下続紀と略す)によれば、桓武天皇延暦5年(786年)和氣清麻呂を撰津職大夫に任じ、荒陵の南撰河の国境を掘り堤を築き、河内川を西の海に導かんとし、延べ23万人を動員したが、ついに同7年(788年)に至り失敗に終わった。また続日本後紀にも仁明天皇承和12年(845年)9月、河内撰津兩國に命

じ、難波堀川に生えていた草木をかり取って、石川・菟田川の洪水を引きて西の海に通ぜんとすとあり、これらの跡が、いまも河堀口から茶臼山にかけてくぼ地として残っている。その後元禄16年(1704年)中甚兵衛の努力により、大和川は付けかえられ堺で西の海に通じ、今日のような大変遷をとげたのである。それによって河内の大沼沢地は干拓され、新田開発が進んだが、これに反して堺港はたちまち土砂が堆積し港の機能を失い昔の堺の隆盛は消えてしまった。河内の低湿地は広大な水田地帯となったが、今日では急速に市街地化しつつあるが、低湿地は相変わらず梅雨・台風の大雨には昔の沼沢を再現し、東大阪寝屋川水系の内水問題となっている(図-4)。

図-4 最近における大阪付近の水害地域



4. 堀江と淀川河口の変遷

紀に仁徳天皇11年10月、宮の北の野原を掘り南水を引きて西の海に通ず、この流れを堀江と名づくとのある。

上町台地北部の古代微地形を考えてみるに、大阪城調査のさいのボーリング結果によれば天守閣付近の高台は20m以上におよぶ盛土から成り、上町台地の洪積層と違っている。いまの大阪城地域は古代には低湿地であり、豊臣秀吉が大阪城築城のときに濠を残して盛土をしたものらしく、このように考えると濠や城内の井戸の水の謎も解けるであろう。

法円坂の遺跡発掘により、仁徳の高津宮、孝徳の長柄豊崎宮、聖武の難波京はすべて、いまの大阪 NHK 放送局裏と推定され、また応神の大隅宮はいまの大阪府庁から大手町高校付近と想定される。難波崎とよばれた上町台地の北は大手前付近から天満付近にかけてビンの頸のように細くくびれるとともに低くなり、その先が野に続き天満の森・豊崎の野・長柄と頭のように広がっていたのであろう。難波崎の東麓は河内川がいまの大阪城の濠の辺りをう回して、河内の入江の水を弁天町(いまの大阪城の北にある寝屋川)付近で合して、桜の宮あたりから、いまの天満川を南から北に流れ毛馬・長柄の間で淀川の河口をなしていた長柄川(後の中津川)に流れ込んでいたようである。都島あたりは沼沢の多い低湿地で東野田の大阪大学工学部裏手あたりにも天満川の派川が

あったらしい。このありさまは、いまでも天満川の源八橋の上に立って見渡すと西岸が高く、東は広く低地が延びていることから推察されるであろう。難波崎の西麓は海がせまり天満辺りは海が湾入し、ここも長柄江といわれたらしい。長柄は「流ら」で固有地名ではなく、ところどころにある。

高潮時に天満川に潮が逆流したり、淀川増水時には河内川がせかれて、東生や入江周辺の低湿地がつねに浸水するため田畑も少なく村里も苦しんでいたであろう。宮の北の野原を掘るとあるのは、上町台地がピンの頰のように細く低くなった、いまの桜の宮の造幣庁の南あたりから京阪電鉄天満駅あたりを掘り、天満川を西の海に通じ、ここを堀江としたのであろう。南水を引くとあるのは、この捷水路によって河内川（大和川の派川）と入江の水を天満の海に通じたのであろう。これによって新田干拓が試みられたものと思われる。

しかし別の見方もできる。淀川の河口をなしていた長柄川（中津川）は島や洲の発達によって閉そくされつつあり、淀川は古くから毛馬・長柄で天満川に分流し、天満川を北から南に流れ、河内川や入江の水は大阪城の北や東野田のあたりを流れて天満川に通じ、また野江・関目・赤川の水道を通して、毛馬付近で淀川と合流しており、天満川ははじめから堀江を通じて天満の海に注いでいたが、堀江が土砂で埋没したので、しゅんせつしたにすぎないとも考えられる。しかしどうも前者の方がよいように思われる。

いずれにしても堀江の開削は淀川河口に大きな変遷を起こさしめた。長柄川（中津川）は分流点付近から土砂で埋没され、淀川は天満川を主流として北から南に流れ堀江を通して西の海に注ぎ、出水ごとに天満川や堀江は発達していった。それにつれて難波崎の西に土砂堆積が起こり、船場・島の内といった西成の陸地造成が進み、その河口は交通の要衝となり渡辺津（いまの天満橋と天神橋の中間八軒家）が栄えた。西成の洲が東横堀あたりまで延びたころには、ふたたび堀江の河口は埋没されて行き、桓武天皇のころには淀川下流に水害がくり返されるようになった。延暦4年（785年）撰津国神下・梓江・鱒生野（味原野）を掘り、淀川の水を江口から三国川（その上流は安威川、下流は神崎川）に通じた。そのため淀川の主流は三国川に移り、鎌倉時代までは三国川に沿った鳥飼・江口・蟹島・大輪田・神崎・大物の浦等の津が栄え、堀江の渡辺津は大江の渡として名残をとどめるにすぎなかった。その後足利時代には三国川が埋没し、ふたたび天満川が淀川の主流となり、いまの大阪市の西部をなす昔の西成郡が急速に陸地造成せられて行った。室戸台風やジェーン台風の高潮では、足利時代の東横堀の海岸線が再現されてしまった（図-4）。

淀川河口は中津川・天満川・三国川の3つを埋没しつ

つ交互に主流を転じ、徳川時代には数回にわたって天満川のしゅんせつや諸堀川の開削が行なわれ、明治11年にいたって、中津川がふたたび主流として新淀川になった。

5. 茨田堤

紀には堀江に続いて、北河の湧（大水・溜り水）を防がんとし、茨田堤を築く、このとき断間2カ所ありて壊れて塞ぎ難く、武藏の人強頭と河内の人次田連杉子を費として河伯を祭り、その堤成る、その断間を強頭の断間・杉子の断間と名づくとのある。

茨田は和名抄（源順、935年）には「万牟多」と訓じ、河内国茨田郡は8郷よりなり、淀川左岸に沿い、いまの寝屋川市北部から守口市南部にかけての地域である。茨田郷は寝屋川北部あるいは枚方市南部にあったといわれているが、そのほかにも、守口市の南方城東区にも茨田の地名があり、昔の新開地の位置に茨田横堤がある。仁徳天皇の茨田堤にも二説あって、一般には北河を山背川（山城川、いまの淀川）と解し、茨田堤をその左岸堤防とみて、枚方南部・太閤から守口・今市・毛馬に至る線であるとしている。また、一説では太閤から北河内の大和田・古川橋・門真・城東区茨田に至る古川の線であるともいう。この両者の間は淀川左岸の自然堤防が微高地をなす地帯であり、茨田堤をこの微高地の淀川に面する堤防とみなすか、背後の入江に面する堤防とみなすか、その判断はむずかしいが、城東区茨田は当時はまだ入江の底に没しており、北河の横流や断間からみて、淀川左岸堤防と解するほうが説明しやすいようである。

淀川は木津川・宇治川・桂川の3川からなり、古代には宇治川は大戸川の合流点に浅瀬があって天然のせきが琵琶湖の水をせき、桂川には嵐山保津峡の狭窄部があって亀岡盆地を遊水地として洪水を調節していた。慶長10年（1605年）角倉了以が大堰川の嵐山峡を切り抜けて現状の桂川となったものである。木津川は笠置の狭窄部や伊賀盆地・大河原の遊水地があり、さらに3川合流点には巨原池・横大路沼といった広大な遊水地があり、淀川下流部の洪水はいちじるしく緩和されていた。淀川右岸の三島・江口線の自然堤防と左岸の太閤・守口・森小路線の自然堤防との間は現在の河巾の約3倍もあり、さらに海が湾入し河口は長柄付近にあって流路も短かく、河床も低かった。当時の淀川下流の洪水流量はせいぜい3000~4000 m³/sec程度と推定され、その水位は2.0~2.5 mであるから、兩岸の比高2.5 m程度の自然堤防が普通の洪水ならば十分防いでいたとみるべきであろう。これは微高地の弥生式森小路遺跡の存在からも知られよう。しかし仁徳天皇のころに、自然堤防が延びて流路が長くなり、河口には島や洲が発達して流れが阻害され、水位が上昇して自然堤防の低い部分や断間から淀川

の水が、入江に横流れするようになったのではなかろうか。

仁徳天皇の茨田堤なるものは自然堤防を利用して高さ1.5~2m程度の堤防を築いたり、自然堤防の断間を閉そくしたり、低い部分を補強したりしたに過ぎなかったのではなかろうか。当時はまだそれ以上に高い堤防が必要であったとは思われない。森小路・千林付近の微高地上にある旧家が、後世の淀川洪水に備えて1~1.5m程度の盛土の上に家を建てていることや、明治18年淀川大洪水のときの浸水水深を当時の古地形に引き直してみても推察されよう。いずれにしても今日見る堤防とは相当違ったものであったであろう。

難工事を書きわめて生贄まで捧げた2カ所の断間のうち杉子の断間は寝屋川市北部の友呂岐太間とする説のほか、枚方市野田付近とか、当時の淀川が西の方に蛇行していて高槻市野田付近（大正6年の洪水で堤防の切れた大塚）とする説もある。また強頸の断間を今市・千林（東生郡、いまの旭区）付近とする説がある。寝屋川水系の内水による浸水範囲や古絵図から考え、また太間は後世寝屋川に通ずる用水路の取入口でもあり、その背後に茨田池ががあって、当時はここから淀川の水が入江に通じていたと思われること、守口の大庭と今市付近はその背後が内水による浸水常習地帯であることを考え合せると、自然堤防には太間・大庭・今市の3カ所の断間が想定され、茨田堤はこの中の2カ所とみてよからう。このほか赤川から毛馬の間に入江が淀川に通ずる水道があったと思われるが、当時の技術ではこの大断間を閉そくすることは無理であろう。いまでも淀川出水のときには、これらの断間の地点は堤防の裏に湧水をみやすく水防の要点でもある。

紀・続紀等から8世紀までの茨田堤に関係のある記事を拾ってみると（カッコ内は現在暦）、

- (1) 天平13年4月(741・5)、河内・摂津、河堤を争う。これを検校せしむ（続紀）、
- (2) 天平勝宝2年5月24日(750・7・2)、大和・河内聚雨洪水、伎人・茨田堤等決壊す（続紀）、
- (3) 宝龜1年7月22日(770・8・17)、志紀・渋川・茨田等の堤を修理す。単功30,000人（続紀）、
- (4) 宝龜3年8月6日(772・9・7)、1日より雨続き大風吹く、河内国茨田堤6ヶ処、渋川堤11ヶ処、志紀堤5ヶ処決壊す（続紀）、
- (5) 延暦3年9月5日(784・9・23)、京中大雨、同閏9月10日(同10・28)、河内国茨田郡の堤15ヶ処決壊す、単功64,000人（続紀）、
- (6) 延暦4年9月10日(785・10・17)、河内国洪水氾濫す、同10月27日(同12・4)、河内国堤防30ヶ処決壊す、これを修築せしむ、単功307,000人（続紀）、
- (7) 延暦15年8月7日(796・9・12)、淫雨畿内・諸国洪水（後紀）、
- (8) 延暦18年4月9日(799・5・18)、山城・河内・摂津等洪水（後紀）、

等がある。

延喜式神名帳によれば、河内国茨田郡に堤根神社・津島部神社があり、後者は文徳天皇実録には堤津島女神とある。これらを考え合せると、仁徳天皇の茨田堤築造の真偽は別として、5世紀から、日本書紀の編纂せられた720年までに、なんらかの茨田堤が築造せられていたことは確かである。

また仁徳13年10月横野堤を築くとあるのは、百済川（平野川）の右岸^{くまた}枕全付近の堤防とせられている。

6. 河伯と強頸と杉子

茨田堤を築くとき、断間2ヶ処あって堤壊れて塞ぎ難く、天皇夢みたまひ、武蔵の人強頸と河内の人^{まんだのむらじ}茨田連の杉子の2人を生贄として河伯を祭り、その祟りを静めんとす。強頸は泣き悲しみて水に入り死す。杉子は神の真偽を疑い^{ひさご}匏2ヶを断間の流れに投げ、「もし真の神ならばこの匏を水中に引き沈めてみよ。沈めればわれ水に入らん。沈めざるは偽の神なり、われなんぞ身を亡ぼさんや」という。風起りて匏を水に沈めんとせしが、浮きたるまま波の上を流れ去る。杉子死せずして役に従い堤成る。

この説話を文化の遅れていた東国からきた^{ひょう}倭丁または兵士の強頸は原始的習俗に殉じ、文化の進んでいた畿内人である杉子は神の真偽を疑い、神を試み、原始的習俗を否定したものであると論じる人もある。

河伯は中国からきた陰陽道が祭る水神であり、仁徳天皇のころにはまだ伝来していないと思われる。皇極1年(642年)7月祈雨のため河伯を祭っており、延喜式神名帳には安福河伯神社（陸奥国亶理郡）があり、河伯は加波とも書かれ、加羅加波神社（備後国御調郡）・和爾賀波神社（讃岐国三木郡）・甲波宿爾神社（上野国群馬郡）があり、わが国でも古くから河伯を広く祭っていたことがわかる。

しかし当時の水神は、まだ米作とともに南方からきた原始的な竜蛇神であり、茨田郡にはその意賀美神社があった。弥生式時代、農耕をはじめた古代人は絶えざる川の流れに不思議を、また洪水には驚怖を感じ、そこに素朴な古代水文観念を生んだ。人の近づいてはならない川上に沼があり、その沼の主たる大蛇が水を出していると考えた。暴風雨や洪水はこの沼の主の祟りであり、大蛇に人身御供を捧げねばならなかった。旱天には沼の主^{かみ}に雨を祈った。これを裏づけるような昔話や伝説は各地に沢山残っている。この大蛇神に捧げる人身御供には、古くは土地・水利権の支配者自身が当たったが、農耕が進み母権制時代になると水の神と田の神とが結合して^{かみ}処女が選ばれるようになった。さらに人智が進むと神を試み、大蛇退治という形成で、自然神と人格神とが交代し、人身御供は祭に形式化され^{まじ}巫女に変わる。紀には仁徳67年

県守の虬退治の話がある。虬は水の主で大蛇である。

河伯については抱朴子に、「馮夷これ華陰（陝西省）の人、8月上庚日に河を渡りて溺死す。天帝これを補署し河伯となす」とある。史記（司馬遷、BC 91年）河渠書によれば、漢の武帝元光3年（BC 132年）黄河が瓠子で決壊し、河水は南東に流れ鉅野に至り、淮水・泗水に連らなつたまま20余年修復されず、村里ごとく河となり、人民は困窮した。武帝は封禪の翌年（BC 109年）泰山を過ぎ瓠子に至り、黄河の決壊場所に白馬と玉璽を沈め河伯に祈り、堤防の修復につとめた。そのときの瓠子の賦の一節に、「わがために河伯に告げよ、汝何ぞ不仁なるや」とまた「美玉を沈めて河伯に祈る」とある。瓠子には2ヶ処の断間ありて塞ぎ難かった。漢の武帝の黄河の堤防修復は成功しなかった。

仁徳天皇の茨田堤の説話には中国臭が強いが、この漢の武帝の瓠子堤の話と全く規を一にしており、白馬に強頸を、美玉に衫子を擬し、衫子の匏は瓠と同じであり、河伯の祭祀や断間2ヶ処も一致している。

強頸を東国からきた筈丁とし、その話を長柄の人柱譚と同類の人身御供譚とみるよりも、武蔵は馬の産地であり、強頸は馬の太い強い頸の意を寓した馬の擬人化とみる方がよいであろう。古くから水神を祭るに馬を供えた例は多く、神馬や絵馬にも尾を引いている。延喜式では丹生川上社と貴布禰社に祈雨には黒馬を、霖雨不止祭には白馬を献ずることになっており、統紀には光仁天皇宝龟2年（771年）6月10日、黒馬を丹生川上の神に奉る、早すればなり、同3年（772年）8月6日、風雨、伊勢月読神に荒神祭に準じて馬を奉る、同6年（775年）9月20日、白馬を丹生川上・畿内の群神に奉る、霖雨すればなり等がみられる。また人柱伝説にも陸中松崎村に、白馬に男を乗せて人柱として水神を祭り、その妻が後を追って入水したという哀話がある。インドにも同じような伝説がある。近江国浅井郡馬川に、洪水のとき白馬が現われるという伝説があるが、これは水神に白馬を供える祭祀習俗と洪水に白髪の老人が現われるという白髪水伝説とが結合したものであろう。河童は水神が零落して妖怪となり、さらに威力を失なって滑稽化されたものであり、河童の駒引きは水神に馬を供える習俗と関係があるものと思われる。水神に馬を供える習俗は南方からきたものであろうが、水神と馬との関係の由来はいまだ明らかになしえない。

衫子は茨田堤の工事を指導した茨田に住む帰化人の名でもあろうか。衫子は男であるが、字義は女の服であり、水神への人身御供伝説とみられる佐用姫譚の形式化ともみられよう。

問題は衫子の匏にある。匏は水神の持物であり、また水神を祭るときの供物であり祭具である。古くは匏は水を汲み、水を入れておく容器であった。延喜式の鎮火祭

祝詞に「水神匏、埴山姫川菜持て鎮め奉れ」とあり、また御川水祭等には匏を供えることになっている。しかし多くの場合匏は水神を屈服するための呪物として出てくる。昔の旅は渡川が決死的であり、渡川のとき身に多くの匏をつけて浮子にしたり、後には護符としたのであろう。航海のとき身に匏をつけた例として三国史記に新羅の瓠公伝説がある。

紀には仁徳67年吉備川島河に大虬ありて人を苦しむ、笠臣の祖県守淵に臨み3ヶの全き匏を水に投じ、「汝毒を吐きて路人を苦しむ、われ汝を殺さんとす。この匏を沈めればわれ避けん、沈めえざば汝を斬らん」という。虬鹿に化りて匏を水に引き入れんとすれども沈まず。県守劔をとりて水に入り、ことごとく虬の一族を斬るとある。このように仁徳紀には匏を水神を試みる呪物として2回も出てきている。これらの瓠譚の原型は昔話の水乞型蛇簪入譚に通じている。昔話の一型に、「ある長者が早天に田に水を引いてくれるものがあれば、娘を嫁にやろうという。沼の主が田に水を引いたので、3人娘の末娘が大蛇に嫁入りすることになり、嫁入道具に匏千個、針千本を持って行き、沼の主はこの匏を沈めたら嫁になろうという。大蛇はこの匏を水中に引き入れようとするが沈まず、そのうちに針の鉄毒に当って死んでしまう。昔話ではこの後に姥皮型譚の続くことが多い。この昔話は東北から九州まで全国的に広く分布しており、さまざまに変化され、河童簪入譚にもなっている。淀川を舞台にしたお伽草子の鉢かつぎ姫譚も姥皮型譚と匏を鉢に代えた譚を結合してできている。安政大地震の瓦版等でみられるように昔は地震も大蛇の所為とし、大蛇がナマズに化けて、大国主命が地震ナマズをヒョウタンで屈服するというヒョウタン・ナマズの説も生れている。

7. あとがき

わが国治水史の初頭を飾っている仁徳天皇の茨田堤の事蹟は、日本書紀の編者が漢の武帝の黄河瓠子堤の話を焼き直し、それに伝承・民譚を結合して史実かのごとく作り上げ仁徳紀に挿入したとみるべきであろう。しかし仁徳天皇の事蹟としての真偽は別として、4～5世紀ごろ茨田堤を必要とし、それを築くだけの技術も十分にあって、遅くとも紀の編纂された720年までには、なんらかの茨田堤が存在したことは確実である。

戦後昔話や伝説が急速に消滅しつつある。一日も早く全国的に川・海に関する、さらに広く土木全般に関する民話・伝説や習俗を調査集録しておかないと、ふたたび採集することはできなくなってしまう。古墳や遺跡と土木工事との競合についても研究が必要である。個人的趣味では間に合わない、ぜひ強力な土木の機関がこのような仕事に乗り出してほしいものである。

（備考：全文にわたり大阪府の地図を参照せられたい）

（原稿受付：昭.35.4.8）